中の石鏃、(3)の欄間用木材斷片、(3)(4)の紋甎等を擧げて置きたい。

印度彫刻の部は十一葉悉く石彫であつて釋尊像、同説法像、同降誕像を初め、皆印度彫刻の粹を集めたものである。

下卷佛典の部は晉より唐に亙る間の寫經六十八葉、別に附錄として高昌國の寫經、經跋等八葉を收めてある。これなど一々の佛典の本文研究の結果は既に一部世に發表せられたものがあるが、其の他のものについては余輩の今知り得ざる所である、それについては後日の發表を待つとして、別にたゞ古寫經を愛玩する人々に向つては先づ(1)に見えて居る西晉の元康六年寫諸佛要集經一葉を以てしても充分に古香に醉はしむることが出來、また隷楷書體變遷の過渡期の有樣を悟らしめて、大なる滿足を買ふことが出來るであらう、なほ(2)(3)も晉代の寫經、(4)(5)は西凉建初七年の寫經(6)以下(45)に至る迄は悉く六朝時代、(46)—(55)は隋唐の間、(56)—(68)は唐代の寫經で、六朝、隋唐時代の精妙を得たと思はれる筆致を示したものもある。附錄中には從來の年表を繰つて見ても絶えて記されて居ない建昌・延昌・延壽などの高昌の年號を以て年月を附せられた寫經數種が見えて居る。此等は梁の時代より唐代に及べるものであつて（藝文第六年第十一號內藤博士「高昌國の紀年に就て」を參照せられたい）從來全く知られなかつた事實を語つて居るものである。なほ此の附錄中の(7)なる貝葉式の古寫律文斷片、同偈頌斷片なども經典の形式の上から重要視すべき資料である。

史料の部は二十六葉、(1)の晉の泰始五年の日附ある木製招子をはじめ(2)(3)の咸和年間前凉の西域長史であつた李柏から焉耆王に送つた書讀の草稿二葉、(9)の唐天寶五載、大曆九年の牒狀、(11)の大曆十六年の借錢文書、(16)の(3)